

山本弘文編：交通・運輸の発達と技術革新——歴史的考察——（国連大学プロジェクト「日本の経験シリーズ」7）国際連合大学（東京大学出版会発売）1986年3月 A5判 275頁 3,800円

本書は国連大学による「日本の経験」シリーズの1冊として刊行されたもので、編者をはじめ増田広実、原田勝正、青木栄一の4氏による共同研究の成果の公表である。

その内容は、1 伝統的交通・運輸体系、2 移行期の交通・運輸事情、3 鉄道優先時代の交通・運輸、4 交通・運輸技術の自立、5 交通・運輸体系の統合、6 戦時下の交通・運輸、7 戦後復興期の交通・運輸、8 交通・運輸の新たな展開、という8章からなる構成で、各章がそれぞれに時代・時期区分と対応し、巻末には各章ごとに参考文献があげられ、明治元～昭和59年にわたる関係年表もつけられている。

各章を一貫して、まず中央政府の運輸政策の展望、その立案過程の諸問題の解明がなされ、また近代的技术の導入から自立への展開過程、さらには道路、鉄道、沿岸・内陸水運等の展開・連関状況についても各時期ごとに追究されており、まさに史的考察と称するたる内容である。

一読して肝銘を受けたのは、これら主要課題について執筆者相互間に共通的な問題意識の共有であり、明治維新から最近までの日本の交通・運輸の展開過程をこの書一冊だけで多角的に把握可能なようにとの行きとどいた配慮である。それぞれが交通史、交通地理、交通政策あるいは技術史・道路工学等々さまざまな分野の専門家によって、まことに啓蒙的かつ学際的な成果が公表されたことこそ評価すべきであろう。

交通とは唯単なる線的なものではなく、各種交通手段を複合する面的なものとも認められる。たとえば鉄道開通の遅速が地域社会のありようにどのように作用して来たのか、日本の各府県の場合も、明治年間を通じてまともな鉄道皆無という事例があり、同

一府県内であっても特定の一地方がこれに準ずる場合もまた例外ではない。したがって全国的な鉄道路線の合計軒数の増加傾向だけの考察や計画路線の図示などに留まる限り、歴史的考察とは称しても、あまりにも皮相的すぎることになりはしないか。この疑問はまた、交通機関の技術改新についても、その面的な利用範囲さらにはそこでの利用頻度の差異等の解明が期待されるとしてよい。

さらに評者の関心事からすると、近代交通網形成以前つまりその前史に関する追究があまりに通る一片すぎることである。われわれの体験が万が一にも他の社会の人々の参考になるものとすれば、日本の場合、近代交通体系の導入、普及以前において、その前史がどんな様相を呈し、その地域差は如何様であったかなどがまず言及されるべきであろう。そのような背景または基盤のもとで試行錯誤の反復が移行過程とみられ、これこそ「日本の経験」と称し得るのではあるまいか。

過去の陸運は五街道の宿継ばかりではあるまい。内陸水運の末端には、脇往還の「付通し」運送担当の百姓手馬、飛脚輸送、さらには広範囲の付通しを実現して来た信州仲馬、信越牛方中、仲附駕馬等々もあった。維新以降、道路改修あるいは鉄道開通に伴って、これら在来の運送業者の中には荷車・馬力等を利用する者が生まれ、信州仲馬の仲間の中には組合製糸の中核となるものも続出している。

また中央で策定の基本方針も、その受入れにはさまざまな地域差が少なくない。たとえば五街道のみならず脇往還でさえ鉄道路線に反対し、停車場の位置を宿駅から離れたところに設定するなどの事例も例外ではあるまい。その結果がその後の盛衰をいかように左右して来たかも、われわれの経験として特筆すべき要があろう。

先駆的業績と認められるが故に、いささか望蜀の言辞を加えたが、近い将来、改訂の機会があったら是非加筆して欲しいとの期待の一部を述べておくことにする。

（黒崎千晴）